



浅草の木馬亭前にて

浪曲師 木村勝千代

節にのせて伝える物語。 大衆芸能、浪曲に魅せられて

10歳で浪曲に出会い、11歳で初舞台を踏む。小中高大に在学中、さらに就職してからも浪曲師として舞台に立ち続けた。結婚・出産を機に一時は舞台から離れたが、5年前に復帰。木村派を継ぐ者として、古典から新作まで幅広く演じている。

♪なかみは～ぜんぶ～そのまま～
くろこげに～なっていた～
節をつけた語りを三味線の音が引き立てる。
「熱かったじゃろね～」
情感たっぷりの台詞が涙を誘う。

「広島・原爆の日」の翌日、8月7日。浅草の木馬亭で浪曲師、木村勝千代さんが演じたのは原爆によって広島で消えた幼い命とその母の物語「まっ黒なおべんとう」。

子育て中に会った児玉辰春氏による絵本。「いっかやらなきゃ」と思って、温め続け、5年前に浪曲界に復帰した際に仕上げた演目だ。

浅草の演芸場、木馬亭は平日の昼にもかかわらず、多くの人で席が埋まっていた。年配者に混じり、修学旅行中らしき中学生の一団も見られる。30分きっかり

きむら かつちよ

本名は田中瑞穂。1967年に山梨県上野原市で生まれ、現在に至るまでずっと同市で暮らす。専修大学文学部国文科在学中は片道2時間の通学。90年卒業後、専門学校・学習塾で勤務。98年に結婚し、2児の母。趣味は津軽三味線、旅行。10月中旬にはNHKラジオFM「浪曲十八番」で「まっ黒なおべんとう」が放送された。

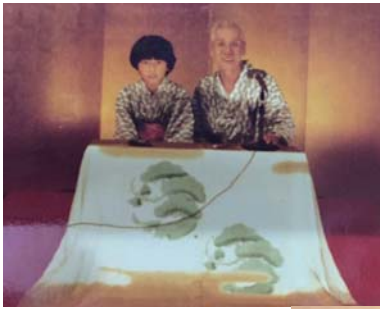
で勝千代さんの口演が終わると、会場は大きな拍手に包まれた。

浪曲にはまり、小学生で舞台デビュー

浪曲との出会いは10歳の時だ。周りの子供はキャンディーズやピンク・レディーに夢中になる中、勝千代さんの心をとらえたのは二葉百合子の歌謡浪曲「岸壁の母」。戦地から息子の帰還を待ち続ける母の心情を歌と語りで切々と訴える曲を耳にし、「手に取るように気持ち伝わり、物語に引き込まれ、涙がこぼれた」という。

丸々一曲真似して覚え、老人会の集まりで披露すると喝采を浴びた。大人しくて恥ずかしがり屋の少女の新しい世界が開けた瞬間だった。

↓中学校時代



↑小学校時代、
木村松太郎師匠と



↓現在



→大学時代



せっかくだからと浪曲を習い始めた。そのときたまたま通い始めたのが、浪曲家、木村松太郎のファンが集う同好会。ほどなく周りの勧めもあって、木村松太郎に弟子入りする。毎週末、山梨の自宅から師匠の住む埼玉まで、父親の車で3時間かけて通った。

師匠はその時すでに80歳代。浪曲界最年長と最年少の師弟。稽古場では師匠の奥さんの三味線に合わせて謡う。見守る師匠は片耳にイヤホンを突っ込みラジオの競馬中継を聴いているなんてこともあった。「ちゃんと聞いているのかな」と思っていると、「ここはこうした方がいいよ」ときちんとアドバイスしてくれる。そして最後は必ず「よくできたね」と。とにかく褒められたのが思い出だ。

学校に通いながら、舞台上に立ち続けた。高校時代には劇作家・寺山修司の追悼公演「青森県のせむし男」に、女子高生の浪曲師というそのままの役で出演。時にテレビの取材を受けることもあったが、周りに知られ、「凄いね!」と注目されると、照れくさかった。浪曲をしていることは、わざわざ友達に話していなかった。

専修大学文学部国文科に進学後も、学業の合間に木馬亭に通い、舞台上に立ち続けた。だがこの頃、迷いを感じていた。

「子供の頃から当たり前のように師匠のやる演目を覚えてやってきたけど、そこから先、自分が何をやらたいのかがわからなくなってしまったんです」

長いブランクを経て、浪曲に戻る

大学卒業後、専門学校に就職。浪曲と二足の草鞋を履いていたが、忙しく仕事に追われる中で舞台上に上がる回数は減っていった。31歳で結婚、そして出産。子育てに充実した日々を送り、舞台上に立つことはなくなった。

「やめるつもりもなく、いつの間にかやらなくなって、どこか心に引っ掛かるものがありました」

テレビから三味線の音が流れれば、心が疼いた。あるとき、特別支援学級で読み聞かせをする機会があったが、絵本のキャラクターになりきって読んで聞かせると、それまで見向きもしなかった子供が目を輝かせた。「表現することを思い出させてくれた」。

居ても立ってもいられなくなって、ぼちぼちとだが稽古を再開。そして、子育てが一段落した5年前に再び舞台上に立った。

「まっ黒なおべんとう」はその頃、初めて自らの手で創り上げた作品だ。台本を書いて、三味線にのせて、また書き換えて。試行錯誤の労作だが、確かな手応えがあった。

この演目は評判となり、中学や高校に招かれ、平和学習としての口演も行っている。浪曲は初めてという生徒ばかりだが、夢中になって聞き入る姿がある。

高2の時に師匠が亡くなって以来、木村派を一人で背負う。残された音源を頼りに「慶安太平記」など木村派の演目の一つ一つ掘り起こし、再演している。また依頼を受けて、地方に伝わる伝承などを浪曲に仕立てて演じることも多い。大学時代に石黒吉次郎ゼミで学んだ古典『御伽草子』の「鉢かつぎ姫」を浪曲で演じたりもしている。長きブランクは、表現の幅を広げてくれたようだ。

明治から昭和30年頃にかけて、大衆芸能として一世を風靡した浪曲。かつての隆盛とは程遠いかもしれないが、ここ数年でまた少しずつ客の入りが増えていると感じるという。

「演芸場に来ればいろんな話を聞けて、その世界に浸ることができます。その時間は嫌なことも忘れて、笑って、泣いて、すっきり帰ってもらえれば——」

浪曲の魅力を語れば尽きないようだが、「♪ちょうど時間となりました」。浪曲お決まりの締め台詞でお仕舞いとさせていただきます。